

# あいまいな場面における反応尺度の開発と、 その性差の検討

## A development of a scale for response in ambiguous situations and an examination of sexual differences in them.

姫野 紗也加\*<sup>1</sup>  
Sayaka HIMENO

裊岩 秀章\*<sup>2</sup>  
Hideaki HOROIWA

### 1. 問題

我々は日常生活の中で様々なストレスを体験する。これらが大きな精神的な負担となる場合は、抑うつや不安などの反応が表れることがある。体験がストレスとなるかどうかは、葛藤を感じるかどうかが強ク影響すると考えられる。そのような葛藤を感じる場面の一つとして、結果がわからない、先が見通せないといった「あいまい」な場面がある。たとえば、誰かと喧嘩をしまい仲直りをしないまま一日を終えるとき、試験を受けて結果が発表されていないとき、職場や学校の初日でどう行動すればよいかわからないときなどが、「あいまい」な場面としてあげられる。このようなあいまいな場面や状況についてBudner (1962)は、「十分な手がかりが欠如しているために、適切に構成できず、カテゴリー化ができないような状況」と定義している。また西村(2007)によると、あいまいな場面には3つの特性がある。すなわち①新奇性、手がかりが全くない新奇な状況、②複雑性、考慮すべき手がかりが多すぎる複雑な状況、③不可解性、個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況、である。このようなあいまいな場面は、一般に不快なものとして考えられて

いる(増田, 1998)。

しかし、このあいまいな場面に対する耐性力が高い場合は、あいまいな状況や場面を望ましいものとして知覚することができると思われる(Budner, 1962)。

また、あいまいな場面がもたらす複雑な状況を考えて、われわれは不快だから否定的に感じないから肯定的に感じるといった単純な反応だけをするのではないように思われる。すなわち、あいまいな場面に対する知覚の違いは、あいまいさ耐性の高低だけでなく、あいまいな場面に対する受け止め方やその場面の解釈によっても起こりうるのではないだろうか。

一方、ストレスコーピングやソーシャルサポートの研究では、社会的刺激に対する反応には性差があることが確かめられている。加藤(1999)は、ストレスコーピングの性差について調査し、男性の方が女性より課題優先コーピングを使用していることを示した。渡辺(1995)の研究では、女性の方がより多くのソーシャルサポートを得ていて、中でも情緒的サポートが多いことが示された。これらのことから、われわれにストレスをもたらし可能性が大きな対人場面と考えられるあいまいな場面においても、反応に性差が見られる可能性がある。

\*1 埼玉工業大学大学院人間社会研究科心理学専攻

\*2 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

## 2. 目的

あいまいな場面は一般的に不快感を生起させるが、時に肯定的な反応が生起する場合もある。先行研究においてあいまいな場面は、あいまいさ耐性とその耐性の高低という視点、あるいはあいまいな場面に対する反応として「不快・快」という視点から扱われていることが多い。しかしあいまいな場面に対する反応は、状況をどのように受け止めるか、どのように解釈するかということからも影響を受けているのではないか。このような反応には場面を明確にする材料がないため一定の心理的負担が生じると思われるが、これらの複雑な反応がどのように生起するかは定かではない。一方、心理的な負担を解消するコーピングやソーシャルサポートでは男女によって内容や頻度が異なることが報告されている。そこからあいまいな場面に対する反応にも性差があると考えた。

以上より、本研究ではあいまいさ耐性以外のあいまいな場面に対する反応の要因を検討するために、まずあいまいな場面に対する影響因を明らかにするためのあいまいな場面に対する反応尺度を作成し、あいまいな場面に対する反応がどのように生起するかを検討する。またそのうえで、それらの反応における性差を検討する。

## 3. 調査1

### (1) 目的

あいまいな場面への反応に対する影響因を検討するため、あいまいな場面に対する反応尺度を作成する。

### (2) 方法

#### (1) 尺度の作成

尺度を作成するにあたり西村（2007）「曖昧さへの態度尺度」、増田（1994）「心理的健康と関連

する曖昧さ耐性尺度」、友野（2017）「過去に関する曖昧さ耐性尺度」、岡安（1992）「認知的評価尺度」、勝谷（2004）「重要他者に対する再確認傾向尺度」の項目を用いた他、独自に項目を追加し質問紙を作成した。尺度は各項目に対して、あてはまるからあてはまらないまでの4件法で回答するものであった。

#### (2) 調査の実施

調査対象は私立大学に在籍する18歳から25歳の学生の110名（男性68名/女性42名）で、調査は自由意志で参加するものであり同意を得て授業終了時に行った。

#### (3) 結果

尺度の作成にあたり、主因子法・プロマックス回転で因子分析を行った。因子負荷量の低い項目を除き分析を行い、3因子が抽出された。表1に結果を示す。

第1因子は「q18,つらいことだと思う」、「q8,苦痛と感じる」、「q25,思い通りにならないと不安になる」など10項目が抽出された。第2因子は「q5,どうすればいいかわからなくなる」、「q6,戸惑いを感じる」、「q28,考えがまとまらない」など5項目が抽出された。第3因子は「q7,いろんな角度から物事が見られる」、「q10,いくつかの解釈ができる」、「q3,不完全なところがあるから面白いと感じる」の3項目が抽出された。

また尺度の内的一貫性を検証するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、第1因子は0.862、第2因子は0.775、第3因子は0.698であった。全体の $\alpha$ 係数は0.855となった。

第1因子は「q21,わずらわしいと感じる」、「q18,つらいことだと思う」や「q25,思い通りにならないと不安になる」、「q27,そういう状況は困と感じる」などあいまいな場面が不快な感情を喚起させていることからこれらを「不快感情因子」と命名する。第2因子は「q5,どうすればいいかわか

表1 あいまいな場面に対する反応尺度 因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子
18 つらいことだと思う	.884	-.086	-.098
26 気分を害した	.740	-.087	.034
19 やりたいことを妨げる	.664	-.042	.110
21 わずらわしいと感じる	.653	-.056	.178
16 ふさぎ込む	.629	-.021	-.085
8 苦痛を感じる	.534	.033	-.013
14 むしゃくしゃする	.501	.237	-.197
12 自分のことを気にかけてほしいと思う	.476	.100	.007
25 思い通りにならないと不安になる	.472	.208	-.122
27 そういふ状況は困ると感じる	.465	.130	.205
5 どうすればいいかわからなくなる	-.053	.683	-.005
6 戸惑いを感じる	.115	.652	-.061
15 いろんな可能性があるかと判断に時間がかかる	-.054	.635	.219
28 考えがまとまらない	.049	.630	-.067
13 情報が足りないと正確な判断ができない	-.021	.595	.039
7 いろんな角度から物事が見られる	.107	-.216	.770
10 いくつかの解釈ができる	-.006	.229	.737
3 不完全なところがあるから面白いと感じる	-.089	.061	.503

※主因子法・プロマックス回転

らなくなる」、「q6,戸惑いを感じる」、「q15,いろんな可能性があるかと判断に時間がかかる」、「q28 考えがまとまらない」などあいまいな場面やあいまいな場面から生じる感情をそのままにしていることから「困惑因子」と命名し、第3因子は「q7, いろんな角度から物事が見られる」、「q10,いくつかの解釈ができる」、「q3,不完全なところがあるから面白いと感じる」というあいまいな場面を多面的に捉えて意味づけしようとしていることから「多面性因子」と命名する。

#### (4) 考察

##### (1)各因子の持つ意味について

第2因子の困惑因子は、あいまいな場面に対し、あいまいな場面を解消するために何かしらの決定的な対処を行おうとするため、視点が1次元的で固定的となった結果の反応ではないか。ゆえにあいまいな状況を鵜呑みにし、自身のコントロールが及ばないため困惑していると考えられる。しかし第3因子は第2因子とは対照的な反応を引き起こしている。第3因子の反応は、あいまいな場面を、多次的で様々な視点からとらえていること

をうかがわせる。この3つの因子が構成されたことから、あいまいな場面は、不快な感情を生起させるだけでなく、同時に興味や関心などポジティブな要素を喚起させる複雑な構造を持つことを想定できると考えられる。

以上のことから、第1因子ではあいまいな場面に対してコントロール不能感や状況を回避することができないために「つらいことだと思う」、「わずらわしさを感じる」、「やりたいことを妨げる」というような不快感情が喚起される反応、そしてそのあいまいな場面に対しその解消を重要視している第2因子ではあいまいな場面に対し状況をそのまま鵜呑みにするような固定的な視点で場面を解釈した反応、第3因子ではあいまいな場面に対する「興味」や「関心」などあいまいな場面の解決に動機づけされているのではなく場面の新規性、複雑性などに動機づけられた反応、これらがそれぞれ現れていると言えよう。この第3因子の反応は、第2因子よりも、あいまいな状況を第三者目線で解釈したものとも理解できる。

##### (2)あいまいな場面に対する反応のプロセス

この因子の理解により、あいまいな場面に遭遇

した時のわれわれの反応を、プロセスとして捉えることができる。すなわち、あいまいな場面に遭遇したときに、初めに不快感情が喚起される反応が生起し、その後、困惑因子に見られるような、視点が固定的な「当事者視点」による反応が現れる。それに続きあるいは同時に、あいまいな場面に対する好奇心や興味、関心などから動機づけられる場面を多面的に捉えようとする「第三者視点」が表れると考えられる。これらが、特に第3因子と他の因子が同時に生起すると、あいまいな場面に対する両価値性の反応を生み出すと考えられる。

## 4. 調査2

### (1) 目的

調査1で作成したあいまいな場面に対する反応尺度を使用し、あいまいな場面における反応に性差があるかを検討する。

### (2) 方法

#### (1)使用尺度

調査1で作成したあいまいな場面に対する反応尺度を用いた。尺度は例をあげて「あなたがあいまいだと感じる場面を想像し、当てはまるものに○をつけてください」と教示した。質問項目は全部で18項目で、当てはまらない(1)、とても当てはまる(4)の4件法で尋ねた。逆転項目は用いていない。

#### (2)調査の実施

調査対象は私立大学に在籍する18歳から25歳の学生の119名(男性82名/女性37名)で調査は自由意志で参加するものであり調査の同意を得て授業中終了後に行った。

### (3) 結果

あいまいな場面に対する反応尺度の男性の平均

点は44.9点、女性は48.7点であった。点数が高いほど、あいまいな場面に対する反応が大きいことから、男性の方が女性よりあいまいな場面に影響されにくい、すなわちあいまいな場面に対する耐性があることが示された。男女の得点の間に有意な差があるかを検討するため、あいまいな場面に対する反応尺度の男女別の平均値のt検定を行った。その結果を表2に示す。t検定の分析の結果 $t(117)=2.26, p=0.02$ となり有意な差が見られた。

次にあいまいな場面に対する反応の構造が男女によって異なるかを検討するために、男女別で因子分析を行った。男性の因子分析の結果を表3に示す。因子分析の結果、2因子が抽出された。第1因子は「q8,ふさぎ込む」や「q16,苦痛とを感じる」、「q6,むしゃくしゃする」など9項目が抽出された。また第2因子は「q2,いくつかの解釈ができる」や「q17,情報が足りないと正確な判断ができない」、「q5,どうすればいいかわからなくなる」など6項目が抽出された。第1因子はあいまいな場面に対し現時点で生じる不快な感情を扱っていると考えられるため「あいまい場面不快因子」と命名した。また第2因子は、現時点で発生しているあいまいな場面に対して解釈や判断を行い明確化することに対し生じる反応であることから「あいまい場面明確化動機づけ因子」と命名した。また、尺度の内の一貫性を検証するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、全体の値は0.858であった。第1因子は.851、第2因子は.731であった。

次に女性のあいまいな場面に対する反応尺度の因子分析を行い2因子が抽出された。表4に結果を示す。第1因子は「q14,思い通りにならないと不安を感じる」や「q11,つらいことだと思う」、「q2,いくつかの解釈ができる」などの10項目が抽出された。第2因子は「q9,考えがまとまらない」や「q5,どうすればいいかわからなくなる」、「q1,戸惑いを感じる」など5項目が抽出された。第1

表2男女別 あいまいな場面に対する反応尺度 平均値 t検定結果

	男性	女性
平均	44.97560976	48.75675676
分散	82.76482987	44.41141141
観測数	82	37
プールされた分散	70.96377804	
仮説平均との差異	0	
自由度	117	
t	-2.266415361	
P(T<=t) 片側	0.012631869	
t 境界値 片側	1.657981659	
P(T<=t) 両側	0.025263737	
t 境界値 両側	1.980447599	

表3. あいまいな場面に対する反応尺度男性の因子分析の結果

項目	第1因子	第2因子
8 ふさぎ込む	.804	-.204
16 苦痛と感じる	.679	.148
6 むしゃくしゃする	.641	-.208
10 やりたいことを妨げる	.629	.182
11 つらいことだと思う	.628	.170
3 気分を書した	.567	.103
13 わずらわしいと感じる	.513	.278
14 思い通りにならないと不安を感じる	.458	.251
4 自分のことを気にかけてほしいと思う	.379	-.150
2 いくつかの解釈ができる	-.396	.904
17 情報が足りないと正確な判断ができない	-.053	.634
5 どうすればいいのかわからなくなる	.016	.542
1 戸惑いを感じる	.094	.453
15 いろんな可能性がある判断に時間がかかる	.086	.416
9 考えがまとまらない	.299	.355

※最尤法・プロマックス回転

表4 あいまいな場面に対する反応尺度女性の因子分析の結果

項目	第1因子	第2因子
14 思い通りにならないと不安を感じる	.761	-.139
11 つらいことだと思う	.738	.160
2 いくつかの解釈ができる	-.563	.562
8 ふさぎ込む	.544	.236
16 苦痛と感じる	.506	.326
13 わずらわしいと感じる	.485	-.149
3 気分を書した	.462	-.058
4 自分のことを気にかけてほしいと思う	.408	-.006
6 むしゃくしゃする	.284	.178
10 やりたいことを妨げる	.182	.071
9 考えがまとまらない	-.111	.737
5 どうすればいいのかわからなくなる	.320	.665
1 戸惑いを感じる	-.087	.630
15 いろんな可能性がある判断に時間がかかる	.001	.353
17 情報が足りないと正確な判断ができない	.130	.293

※最尤法・プロマックス回転

因子の構造はあいまいな場面に対するその後の事態の展開に視点を置き感情が喚起されているために、不快感が生じていると考えられる。このことから第1因子を「あいまい場面展望的不安因子」と命名した。第2因子は現状のあいまいな場面を明確化することや判断することを目的とした行動ではなく、現時点で発生しているあいまいな場面に対しどのように行動を行えばよいのかわからない状態をしめす構造であると考え、第2因子を「あいまい場面に対するふるまい混乱因子」と命名した。また、尺度の内的一貫性を検証するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、全体の値は0.773であった。第1因子は0.772であり、第2因子は0.691であった。

#### (4) 考察

##### (1) t 検定における男女差について

t 検定の結果、男性の方が女性よりあいまいな場面に耐性があることが示された。有意な差が示された。男女で有意な差が見られた要因としてあいまいな場面に対する態度の違いが考えられる。加藤（1999）が示すように男性はあいまいな場面に対し課題優先型のコーピングを行うが、女性は不快な感情を喚起された影響を受けたままであると考えられ、このことが態度の違いに影響を与えたのではないだろうか。このほか、得点の差は性別以外の他の要因によっても生じていることが考えられる。

##### (2) 因子分析について

男女別の平均点に有意な差があるか検討するため t 検定を行ったところ、有意差が見られたため男女別に因子分析を行った。男性の因子分析結果は、第1因子は「q8,ふさぎ込む」、「q16,苦痛と感じる」、「q10,やりたいことを妨げる」など9項目が示された。第2因子は「q2,いくつかの解釈ができる」、「q17,情報が足りないと正確な判断ができない」、「q5,どうすればいいのかわからなくな

る」など6項目が示された。女性の場合、第1因子は「q14,思い通りにならないと不安を感じる」、「q11,つらいことだと思う」、「q2,いくつかの解釈ができる」など10項目が示された。第2因子は「q9,考えがまとまらない」、「q5,どうすればいいのかわからなくなる」、「q1,戸惑いを感じる」など5項目が示された。男性の第1因子では、「q8,ふさぎ込む」が最初に表れているが、女性の場合は「q14,思い通りにならないと不安を感じる」という項目が最初にきている。また女性では第1因子であった「q2,いくつかの解釈ができる」という項目が男性の場合、第2因子に分類されている。男性の場合、第1因子の構成から現時点で生じているあいまいな場面そのものに対して不快な感情が喚起されていると考えられる。女性の場合、第1因子の最初は「q14,思い通りにならないと不安になる」という項目があり、他にも「q2,いくつかの解釈ができる」が分類された。

このことから男性の場合、第1因子を「あいまい場面不快因子」と命名し、女性の場合第1因子を「あいまい場面展望不安因子」と命名した。

また男性では第2因子に分類され、女性では第2因子に分類された「q2,いくつかの解釈ができる」という項目は男性の場合は「いま、この時点」でのあいまいな場面に対し解釈を行っていると考えられる。一方女性の場合、第1因子において現在のあいまいな場面から発生する未来の予測ができないことにより、その後あいまいな場面が「次はこうなるかもしれない」というように、あいまいな場面が様々に展開していくと見通しをたてるような解釈を行っていると考えられる。第2因子に関して男性の場合、現状のあいまいな場面に対し判断をし、場面を明確化しようとする傾向があると考えられる。女性の場合、第2因子は「q9,考えがまとまらない」、「q5,どうすればいいのかわからなくなる」など現状のあいまいな場面を明確化することや判断することではなくそのままの状

況を受け止め喚起されている感情であると考えられる。これらのことから第2因子を、男性の場合「あいまいな場面明確化動機づけ因子」と命名し、女性の場合、第2因子を「あいまいな場面に対するふるまい混乱因子」と命名した。

このような因子の構造から、あいまいな場面に対し男性は現状のあいまいな場面を全体的にうけとめ、あいまいで情報がわからない場面そのものに対し感情が喚起されるが判断や解釈を行うなどあいまいな場面に対し明確化を行うと考えられる。女性の場合はあいまいな場面に対し、予測できない未来の出来事や展開に対し不安や苦痛を感じ、また明確化していないあいまいな場面に対し、どのようにふるまうべきか、またどのようにふるまえば予測できない展開に対しどのように行動し、対処するかまたはできるのかについて混乱する傾向があると考えられる。

## 5. 総合考察

### (1) あいまいな場面に対する反応

調査1では、あいまいな場面に対する反応を取り出し反応について分析するために尺度を作成した。因子分析の結果、「不快感情因子」、「困惑因子」、「多面性因子」の3因子を抽出した。これらの3因子により、あいまいな場面に対する反応をプロセスとして表現することができると考えられる。この反応のプロセスは、手がかりが欠如しカテゴリー化できない場面のどの情報を取り上げ解釈しているのかという過程から構成されると考えられる。このことは、あいまいな場面に対する反応は、ただ「快・不快」という単純な感情から生起するのではなく、反応を生み出す内的過程があることを意味する。このような内的過程において、われわれは、あいまいな場面をただ漠然ととらえようとしているのではなく、あいまいな場面を自分の経験の中に再構成しようとしていると言えよう。

第2因子の困惑因子は、自身のコントロールが及ばないものの「対処できる要素を検討しようとする」ことから生まれていると考えた。第3因子の多面性因子は第1因子の不快感情因子のような不快感を引き起こす要素以外で「どのような要素で構成されているのか」という視点からとらえようとすることで生まれると考えた。これらのことから、あいまいな場面に対する反応は、第1因子の不快感情因子のような感情による反応だけでなく、あいまいな場面はどのように構成されているかという視点を持ち解釈を行うという流れから生まれる複雑な反応が含まれていると結論付けられよう。

### (2) 反応の性差について

調査2では、あいまいな場面に対する反応における性差を見た。t検定では反応の得点に有意差があり、女性の方が男性よりもあいまいな場面に反応していることが示された。男女別の因子分析では、異なる因子が抽出された。

男性の場合第1因子を「あいまいな場面不快因子」、第2因子を「あいまいな場面明確化動機づけ因子」とした。女性は第1因子を「あいまいな場面展望的不安因子」、第2因子を「あいまいな場面に対するふるまい混乱因子」とした。これをみると、女性の場合は第1因子の構造としてあいまいな場面がどのように展開するか予測がつかないことにより不安が喚起されていることから、視点はあいまいな場面そのものではなく、あいまいな場面の延長にある展望的な場面におかれている。しかし男性の場合は第1因子の構造としてあいまいな場面そのものに視点が固定され感情が喚起されている。このようにその場面に対しどの視点から見るとによってあいまいな場面に対する反応が男女によって異なってくる。これは性差によるものではないだろうか。

男性はあいまいな場面に対し視点が固定的であ

るが、第2因子では場面を解釈し明確化しようとする傾向が見られた。第1因子はあいまいな場面を明確にするために情報収集を行うことから視点があいまいな場面そのものに向けられ、結果として不快な感情が生じていると考えられる。

女性はあいまいな場面に対しその場面から生じる展開が予想できないことから不安が生じ、その不安を回避させるために現時点でのあいまいな場面に対しどのようにふるまえばいいのかわからないために混乱が生じる。第1因子の視点は現在のあいまいな場面ではなく予測のつかない次の展開に向けられている。第2因子は現在のあいまいな場面に視点が向けられ、予測できない展開から現在のあいまいな場面に対しどのようにふるまえばいいのかわからないことが示されている。女性の因子構造は、男性と異なり明確化するための情報を収集するという行為ではなく、次はどうなるかという想像から行動を生起させようとする傾向を示している。

このように、男女によって視点の違いによってあいまいな場面に対して異なる反応が生じたと考えられるが、今回あいまいな場面として想定したのは「対人関係」におけるあいまいな場面であった。そのため「自身の将来がわからない」や「たくさんの選択肢があり、どれを選んでいいかわからない」などの人を介さないようなあいまいな場面は扱っていない。このことから今後の課題とし

ては、より幅広くあいまいな場面をとらえ、対人場面に限らない状況を想定することが必要であると考えられる。また、研究1、研究2共に女性の参加者が少なく、男女の比が偏っている。より詳細に性差を検討するために、今後は女性の参加者を増やすことが必要である。

## 6. 引用文献

Budner, S Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality* 30 10-50 (1962).

加藤知加子 コーピングにおける性差 広島県立保健福祉短期大学紀要 1 13-16 (1999).

増田真也 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学篇 45 241-254 (1995).

西村佐彩子 曖昧さへの態度の多次元構造の検 パーソナリティ研究心理学会 15 183-194 (2007).

渡辺弥生 大学生のソーシャルサポートと社会的スキルに関する研究 静岡大学教育学部科学・芸術 47 151-163 (1998).